

# 序

現在、循環器治療薬の使い方を記した書籍は数多く存在する。研修医あるいは後期レジデント向けに書かれたやさしい本から循環器専門医向けに書かれた詳しい本までさまざまである。どれを見てもよくまとめられており、そのときの医師のニーズに沿ってうまく編集されている。最近の傾向としては、前半で使用される薬剤の特徴を簡潔に記載して、後半で疾患ごとに薬剤の使い方を処方例を示しながら記載する編集のしかたが、医師には最も受け入れられているように思える。

本書の企画にあたり羊土社と幾度もディスカッションして、本書も時の流れに沿って、前半を「薬剤編」、後半を「疾患編」の2本立てで構成することにした。そこから先は、他社との違いを出さなければ、本書が世の中に出る意味がなくなってしまう。購読対象者は、研修医を含む若手医師あるいは循環器が不得手な内科医をターゲットにすることにした。そのためには、「読みやすく」、「わかりやすい」ことが最も大きなポイントになる。書籍の大きさは、持ち運びに便利なサイズにし、疲れたときでも目で見て頭に入ってくるように、図や表を多用した。また、現場の若い医師から「治療薬の選択をわかりやすく示した書籍があれば」と聞いていたので、症例を呈示しながら実際に即した内容で解説することにした。

各項目の執筆者は、循環器薬の使い方のコツとポイントを知り尽くした先生方をお願いした。「薬剤編」では、実際の臨床で使用されているものに限定し、使用頻度の高い薬剤に重点を置いて記載している。薬の作用機転だけでなく、同種・類似薬の使い分けや投与の際の留意事項など、かゆいところに手が届くような内容になっている。「疾患編」では、疾患の解説は簡潔にし1～3の症例を呈示して、循環器薬の投与方法と実践的な使い方について記載している。単に処方例を記載するのではなく、“具体的な投与スケジュール”、“この症例で注意すべきこと”、“この処方であまりいかなかったとき”など、若い医師が最も気になる事柄がふんだんに盛り込まれている。

ぜひ、本書を診療の傍らに置いて、忙しい日々の臨床なかで迷わない循環器治療薬の使い方を習得していただければ幸いである。

2009年2月

池田隆徳